第 140 スタジオ夜話

スタジオ夜話の成り立ち「そもそも論」

☆　はじめに

明けましておめでとうございます。

昨年は色々な事がありました。新年早々能登半島では地震災害が起きました。加えて豪雨により被害が拡大、復興は始まってはいるものの現実的には先の見えない展開となっています。先の見えない復興と言えば福島原発の問題も残っています。メディアでの報道ではかなり復興も進んでいるように見受けられるシーンも多いのですが、原発事故、放射能汚染の問題は地球規模の災害でこの先永遠に解決出来ない問題です。

現地を訪れるとわかるのですが、見てはいけない場所？が未だ多数存在します。既に歴史となってしまったチェルノブイリ原発事故のその後も同様です。エネルギー問題を抱える中石破政権はどう対処して行くのでしょう？アメリカではトランプ氏が大統領に就任しました。世界は益々混迷して行きます。筆者をはじめ読者皆様もこの世界の、日本の、そして私たちの身の回りの状況を見極めて今年も良い年にして行きましょう。「スタジオ夜話」本年もよろしくお願いいたします。

☆　そもそもなぜ「スタジオ夜話」なのか　タイトルはパクリ？？？

趣味嗜好、筆者の好きなものは「酒、煙草。・・・」もありますがこれは嗜好の方です。趣味の方は、現在物置にあるジャンクな化石のようなオーディオ機器の残骸を掘り起こし修理補修することが楽しみの一つになっています。若い頃は専らヨットに勤しんでいました。今でも時々知人のヨットに乗せてもらいます。

小学生の時から始めました。腰越の海からです。すぐ近くにお金持ちの子弟が集まる江の島ヨットハーバーもありましたが筆者は近所の人にいただいた古い 15 フィートの木造舟（船では無い！）でのソロデビューでした。その後様々と乗り継ぎます（中略）。最終的には 28 フィートの生活感あふれるボロ船になり長く楽しんできました。そしてその過程では多くの人たちとも知り合いました。ご近所に母の知り合いで、お身内にヨットの大ベテランがいらっしゃる方が紹介してくれた一冊の本があります。

「スタジオ夜話」発想の原点となる書籍です。「1983 年 3 月～ 1989 年 5 月『きゃびん夜話〈1〉～〈5〉』、舵社・1980 年 2 月『はきなれたデッキ・シューズ』、」集英社でした。著者は田邊英蔵氏です。（名前でググってください。）内容は舵社発刊の月刊「舵」に連載していたもので、毎回キャビンで繰り広げられる酒席を設定してヨットにまつわる面白話を紹介するもので、これが非常に面白く、時には政治の話や経済の話も織り込みながらウィットに富んで薀蓄もある内容でした。『きゃびん夜話』⇒「スタジオ夜話」パクリです。田邊英蔵氏にあやかりたい想いからです。

☆　基本コンセプト　コンプライアンス・リテラシー・ガバナンス　？？？

もっぱら「スタジオ夜話」では「音」をテーマにお話をさせていただいています。皆様ご存知のように「音」というものは元来アナログなものなので本誌の誌名「Full Digital Innovation」にはそぐわない内容となっています。しかし時代の成長と共に「音」を扱う環境も「音」そのものも A/D 変換などが行われ音響機材はほとんどのものがデジタル化されました。制作などの作業環境もコンピュータを使い効率化が進められています。例えば熟練の技、テープ編集（今の若者には理解できない）はベテランでも不可能というレベルにまで初心者が出来るようになりました。アナログな「音」の世界もデジタル化が進んで今日があります。「スタジオ夜話」の内容ではアナログ的なお話が多くなっていますが、本誌でもそうした中での掲載と筆者は認識しています。一方で「音」をテーマにお話をさせていただく訳ですが、最近は筆者の都合で「音」そのものの話ではなく「ラジオドラマ」の制作技法のお話が多くなっています。今後制作技法のお話はひと区切りをつけて本来の「音」の話をして行くつもりです。

☆「スタジオ夜話」とコンプライアンス

コンプライアンスとは辞書で引くと「企業などが、世の中の規則をよく守り、法令を遵守する事」とあります。「スタジオ夜話」では「横断禁止みんなで渡れば怖くない！」は致しません！。しかしながらメディアは世の中の番人です。反体制の側に立つことも重要です。FDI はそんなメディアなのかい？？かつて本当かどうかわからのいのですがこんな話がありました。小樽・ナホトカ（ロシアの港町）間のヨットレースの話です。当時参加していたヨットレーサーに石原慎太郎チームがいたようです。ご存じのようにヨットレースはレースキャリアも重要ですがその船体の設計や搭載機材の性能も重要な要素のひとつです。当時ようやく GPS 機器がヨットに搭載されるようになってきました。いまではスマフォにも標準装備されています。日本艇にはもちろん装備、しかしロシア艇には装備されていませんでした。慎太郎氏は日本外洋帆走協会の重鎮で協会に掛合、ロシア艇に GPS 機材を提供したそうです。すばらしいスポーツマンシップです。しかし後にこの行為がココム違反（対共産圏輸出統制委員会･違反）であることが問題視されました。国からお叱りを受けたそうです。筆者なら「スタジオ夜話」で GPS のお話とこの行為を褒め称えます。これはコンプライアンスに違反しているのでしょうか？法の仕組みが現実にそぐわないなら協議してみることも必要です。「スタジオ夜話」ではコンプライアンス違反に注意はするものの、こうしたケースもあり得ると考えています。注：ココムは現在違う名称で続いています。（ググってください。）

☆　リテラシーとはなんですか？

これも辞書を引いてみると「読み書きの能力」を意味する言葉らしいのです？。使われ方としては「ある分野に関する知識や能力を活用する力」を意味します。

リテラシーを言葉として使う時は頭に？情報とかメディアあるいはマルチメディアなどと組み合わせて使うことが多いようです。例えば音声メディアに関する情報リテラシーが不足・・など。要は各分野における理解能力のことで加えて正しく理解できているか？実行できているかを表現するものとなっています。「スタジオ夜話」でお話する「音」はアナログで曖昧な要素が多くあり「理解･判断能力」は重要です。この「読み書きの能力」に加えて「聞く、見る」も加えることにしています。リテラシーある聞き方を筆者は勝手に「聴く」、見方を「観る」と記述しています。毎回記事を書くとき、このリテラシーに注意して、あるいは意識して書いていますが特に「音」に関するものは個人的な感覚で語ることが世の常であることから筆者は「良い音」と言う評価はしません。「好い音」としています。

これもたとえ話ですが、収録のお話で文中の「良い収録が出来ました。」は作業プロセスのことであり、収録した「音」が良いのでは無いことを理解してください。世のプロフェッショナルな評論をする方たち（良い音と評価する人など）は表現力におけるリテラシーが不足？・・・。編集者が取材する中で評論家が「好い音」と言っているのを広告主の意向に忖度して「良い音」にしていることもあり得ます。言葉で取材していると区別がつきません。

☆　ガバナンス

よく企業が不祥事を起こすとガバナンス（健全な経営を目指す企業自身による管理体制）はどうなっているのかとメディアに追求されている様子を TV などで見かけます。「スタジオ夜話」でのガバナンスとは筆者自身もふくめて「音」業界全体が健全な発展を目指し、リテラシーある者（企業）による管理体制をより一層努力する目標としています。ただ問題なのはこの中の「健全な･･」にあります。以前 SDGs のお話でもしましたが温暖化対策でガソリン車から電気自動車 EV（Electric Vehicle）への移行、これはこれで結構なことだとは思いますが急ぎ過ぎて子細な部分を見落としてはいませんか？筆者は貧乏なので新しい EV は購入できません。（SDGs 目標の 2030 年までは）現在のガソリン車を SDGs します。しかしトヨタも日産も、ホンダにマツダも他各社とも筆者の方には向いてはいません。これが健全ですか？筆者には「好くない」のです。政府も同じですが企業の責任において全ての人を対象に不公平無くという理念はどこにあるのでしょうか疑問です。ちなみに家族が買った軽４輪は（ハイオクワーゲンからの乗り換え）は EV ではありません。デザインが面白い憎たらしいペット顔の４駆です。

なんと今時の軽なのにリッターあたり 10Km 程度しか走りません。健全な･･･？です。大手自動車メーカーの新車発表会で省エネ、自然環境保護の大切さが強調されています。ならばここで環境破壊必須の中古ガソリン車のデイラー販売の中止話でもしたらよさそうですが。以前筆者は音響家協会の講演で公費の無駄使い、公共ホールの音響設備は配線設備だけにすべしとお話したところ、主催者の後援企業の意図があってか次からは呼んでもらえなくなりました。どうも本当の事を言うと NG のようです。

全く別の話ですがリサイクルの国内市場規模は、現在２兆 550 億円 と推計。

今後５年間で 59.52% 成長し３兆 2,780 億円に達すると予測するデータがあります。SDGs もったいない活動も似たような予測をたてています。2030 年には支障なく動くガソリン車、もったいない自動車はどうなってしまうのでしょう。「音」のお話「スタジオ夜話」と企業ガバナンスは遠いところにありそうですが「音」についてのお話、健全な執筆を目指し筆者自身による管理体制の検討は必要であり今後も続けて行きたいものです。

フクロウには全身、綿羽のような羽毛に覆われ翼も柔らかく、丸みを帯びているため、羽音が出にくくなっている。耳は左右の大きさが異なる。右耳は顔のやや下についているが、左耳は更に下方にある。耳の穴の大きさも違う。このように僅かな時間差と強弱によりフクロウ類は音源を正確に把握することができるという。故に暗闇の中でも獲物を狩ることができるのだ。（mo）

☆　次回は

新年早々ダラダラとくだらないお話になってしまいました。筆者初夢の寝言話として聞き流して頂ければ幸いです。次回は筆者の都合でお話している「サウンドドラマ制作」の続きです。筆者の都合もお話します。

昨年一年間ありがとうございました。本年も「スタジオ夜話」よろしくお願いいたします。

読者皆様にとって今年一年が良い年であることをお祈り申し上げます。“春風献上”

ー 森田　雅行 ー